特派員報告から

＝私の履歴書＝

道垣内（どうがうち）　正（まさ）　人（と）

一九五五年、岡山市に生まれ、高校卒業まで岡山でした。これを書くために、小学校の卒業記念文集を久しぶりに開いてみたところ、将来の希望について、「急に、将来の希望なんて言われても、まだはっきりとはきまっていない。たとえば、テレビを見ていて、NHKの特派員なんて、外国へも行けるからなりたいなと思う」と書いています。確かに、当時、何曜日だったか忘れましたが、夜七時半から、特派員報告という番組があり、いつも見ていた記憶があります。田舎の少年にとって、毎週各国から送られてくる新鮮な映像とレポートが、自分の知らない世界に対する好奇心をかきたててくれる唯一のソースだったのです。ただ、現在、私が国際私法という国際的な法律関係についての研究を一生のテーマとして選択したことの源を、この小学校時代の国際的なものへのあこがれに見い出すのは若干行きすぎでしょう。というのは、上記の引用に続いて、その他いろいろと職業を並べ、「まあ、全部はむりとしてもひとつだけでも実現したいと思う」と書き、誰がつけたのか、表題は「困っちゃうな」となっているのです。なお、ちなみに、現在の職業とは、外務省以外のお役所でも、十分に国際的な場で仕事をしたときも、この決心は変っていませんでした。一年生向けの全学ゼミのうち、「国際紛争と法」を希望したときの面接でも、将来外交官になりたいからと申しました。しかし、法学部へ進学する頃には、外務省以外のお役所でも候補のひとつにあがっています。

その後、中学二年生のお正月に、外交官になろうと決意しました。これははっきり憶えています。ある雑誌で、外交官試験についての記事を読み、これだと思ったのです。

高校を卒業し、文Ⅰに入学したときも、この決心は変っていませんでした。一年生向けの全学ゼミのうち、「国際紛争と法」を希望したときの面接でも、将来外交官になりたいからと申しました。しかし、法学部へ進学する頃には、外務省以外のお役所でも候補のひとつにあがっています。

その後、中学二年生のお正月に、外交官になろうと決意しました。これははっきり憶えています。ある雑誌で、外交官試験についての記事を読み、これだと思ったのです。

高校を卒業し、文Ⅰに入学のできる機会のあることを認識するようになり、また、学者という職業にも関心を持つようになっておりました。そして、最終的決断を最後の最後まで引き延ばすべく、できるだけ多くの可能性を残すことを当面の目標にしていました。ところが、公務員試験の一次で落ちてしまい、苦しい決断に迫られることのないまま、研究者への途へ進むことになったのです。

法学部助手の後、しばらく就職先がなく、その間、外務省で週五日間の臨時職員を経験しました。これは私にとっての楽しく有意義な体験でした。そして、その後、明治大学を経て、本年五月から駒場に移ってきました。

以上のように、かなりいい加減な履歴ですが、それなりに一貫しているのではないかと思っています。（法学）